

人形姫

山本幸久

第五回

5

「鐘撞市かねつぎは江戸の昔から人形づくりが盛んなんですよ。たしかに最盛期に比べたら少子化の影響もあって、人形店の数が減りはしましたがそんな中、我が森岡人形は創業百年を誇る老舗しにせで、昔ながらのの仕事で人形をつくっていますね。つまり百年以上積み重ねてきた歴史と職人ひとりひとりの想いが、この雛人形に込められていると言っても過言ではありません」

スーツ姿の溝口真純みぞぐちますみが滔々とうとうと語っている。相手は六十代前半と三十歳前後と思しき女性ふたりだ。さきほどから若いほうが、もうひとりを「お母さん」と呼んでいるのでじつの母娘にちがいない。なによりも少し離れたところに立つ森岡恭平きようへいから見てもわかるくらい、顔立ちがそっくりだった。そしてふたりの前にはベビーカーが

ある。雛人形はその中にいる子供のためだろう。

「たしかにネットの写真だけだと、よそのとおんなじに見えたけど、
こうして実物を目の当たりまにすると、全然ちがいますもんねえ」

母親のほうまが半歩前にでて、飾ってある雛人形に顔を寄せ、まじまじと見ている。

「頭に髪、衣装、手足、小道具とそれぞれ職人がいて分業なんです
よ」

「あらま、そうなの？」「知らなかったあ」

「一体ありて一人いちにんなしと申しまして、各々の職人が自分の力を十二分に發揮して、丹念に数え切れない工程を経て、一体の人形を仕上げていくんです」

おいおい。

森岡恭平は胸の内うちで溝口にツツコミを入れる。一体ありて一人なしは溝口が勝手につくった言葉だ。元は一艇ていありて一人なしという、ボート競技に携たづなわる者であれば、だれもが知る箴言しんげんである。

いまいるのは日本橋にほんばしにある百貨店の八階催事場で、雛人形の陳列即売会が開催されていた。森岡人形ではここを含めて都内八カ所の百貨店や大型スーパーなどの即売会に参加しており、期間はどこも大概、年明けから桃の節句当日の午前中までの二ヶ月間だった。

販売の手つづきに関しては各々の店員なりスタッフなりにお任せ

だが、商品の説明やそこからの売り込みとなるとそうはいかない。とは言っても森岡人形には、日本人形の営業は熊谷良隆ひとりしかおらず、社長の恭平自らが出張らねばならなかった。経理の幸田こうたき吉きちにも廻まわってもらう。

今年はその溝口が加わることになった。即売会に人手が足りないという話を社内のだれかに聞き、お力になれるかどうかわかりませんが、ぜひやらせてくださいと恭平に直訴じきせしてきたのだ。いまだ大学院生で、アルバイトの身である溝口には荷が重かろうと思ひ、一端は断ったものの諦めはしなかった。なおも食い下がってきたほどである。そこまで言うのであればと、恭平は溝口を一日、即売会の会場を四力所連れ歩き、実際に接客までしてもらった。

都内の陳列即売会では例年その年の新作で、通常のものよりも値が張るものを展示している。はつきり言えば上客狙いだ。今年は男お雛ひなと女雛めひなだけの親王飾しんのうりを四十万円ちよつとのへ桜舞さくらまいと三十万円弱うめこみちのへ梅小径うめこみちの二種類、三人官女と嫁入り道具を加えた三段飾りのへ桃雅ももみやびは七十数万円のもを一種類だ。溝口は恭平が連れ歩いた初日にへ桜舞さくらまい二セット、へ桃雅ももみやび一セットの商談を成立させた。すみません、一日で三セットしか売れなくて。

その日一日おえたあと、溝口は詫わびたが、とんでもなかった。平日に三セットも売れば御の字へただった。下手へたすると三日に一セットし

か売れない場合もあるからだ。

溝口はとりわけ接客が上手いかと言えば、それほどでもなかった。しゃべりが達者というわけでもない。しかし一旦、雛人形について話しはじめると、言葉がよどみなく溢れだし、作り方の工程を丁寧に説明していく。それはいいのだが、次第に微に入り細に入り、あまりにマニアックすぎるため、聞いているほうとしては、十分の一も理解できずに、ポカンとするばかりだった。

それでも溝口の熱量は半端ではなく、人形に対する愛情が本物であることは、気圧されながらも相手にじゅうぶん過ぎるほど伝わった。そしてあなたがそこまでおっしゃるのであれば、素晴らしいものにちがいないと購入を決めてしまうのである。

かくして溝口にも都内の陳列即売会をまわってもらっている。成果は上々で、一月最後の土曜だった昨日までに三十セットを売り上げていた。営業の熊谷良隆はその倍だが、恭平は四十ちよい、幸田に至っては二十前後なので、じゅうぶん立派な数字だ。しかも恭平をはじめ、他の三人はほぼ毎日だが、彼女は土日を中心に週三回だけで、一日の平均だと良隆とさほど変わらなかった。

陳列即売会がおわったら、特別手当をだしてやらなきやな。

恭平は銀座の百貨店にいて、午前中には〈桜舞〉と〈梅小径〉を一セットずつ売った。いまは昼の休憩で、溝口の様子を見に訪れた

のだ。歩けば二十分以上かかるので、タクシーを飛ばしてきた。なんだったらこの上の階にあるレストランのどこかで、ランチを奢おごってやるうとも思ったからだ。ところが溝口は母娘相手に接客中だった。邪魔してはいけないと、会場の端から様子を窺うかがっているのだが、五分以上経つたいまもまだおわりそうにない。

とりあえずはあと五分くらい待って、それでも接客がおわらなければ、地下の食品売場で差し入れとして、弁当を買ってきてあげよう。

そう考えているあいだ、とある雛人形が目に入ってきた。恭平が立つ場所は人形作家コーナーの前だ。人形店のとはちがい、どれも独創的なのだが、十数点ある中でも他とは一線を画した、いちばん異彩を放つ雛人形だ。まず着ている服のデザインからしてちがう。いわゆる宮廷装束を基調にしながらも、透かし模様の生地を多用し、どこか異国の民族衣装を思わせ、エキゾチックな雰囲かも気を醸かしだしていた。お内裏様だいりとお雛様ともに渋めの紫色で統一されているからかもしれない。しかも横並びではなく、だいぶ内側をむき、お互いを見つめあい、ふたりだけの世界に浸っているようだ。背後の屏風びょうぶも独特で、大きな三日月と舞い散る桜の花びらが描かれていた。これはもう背景画の類いだ。

けっこう高額である。なにしろ森岡人形の三段飾りよりも高い。

消費税を加えると百万円を超えた。それでも値札には〈※在庫僅少につきお早めのご注文をお奨めします〉と手書きで記されている。嘘ではない。つい先日、百貨店の担当にそれとなく訊ねたところ、人形作家のコーナーではダントツの売上げだった。もともと人気の高い人形作家で、他の雛人形とは購買層がまるでちがいで、二十代から五十代の女性が自分自身のために買い求めていくらしい。百貨店の担当は三十代前半と思しき女性で、彼女自身も熱烈なファンで、わたくしどもの陳列即売会に参加をしていただけなかと依頼したのだという。

以前は森岡人形で働いていたと、ご本人から伺いました。とくに社長には大変お世話になって、鐘撞市のほうには足を向けて寝られないとおっしゃっていました。

桜井桃枝さくらい ももぢのことである。

森岡人形で働いていた頃、桜井は日本各地の人形制作の現場に足を運んで学ぶほど勉強熱心だった。だがまずかったのは、それを頭師の宮沢をはじめとした職人達に勧めたことだ。却かえって反感を買い、しまいに四面楚歌しめんそかとなった。そこで恭平は職人達とのあいだを取り持とうとしたが駄目だった。

つまり私がいなくなれば、すべては丸く収まるわけですね。

そして桜井は辞めてしまったのだ。そのあとすぐに日本人形作家として独立すると、瞬またたく間に人気を博し、いまでは映画や舞台の衣装デザイナーとしても活躍中だ。去年の秋口には六本木ろっぽんぎで個展を開いたほどである。恭平はその招待状ばかりか、桜井自身からメールで在廊の日まで教えてもらっていたにもかかわらず、遂ついにいかなかった。職人達から彼女を守れず、自ら引導を渡してしまったことを未だに悔やんでおり、会わず顔がないと思っっているからだ。社長もお辞めになったらいかがですか、この会社。いっしょにくりりたい人形、つくりましたよ。

桜井にはそう言われもした。恭平にすれば社長の自分が辞められるはずもなく、そもそもつくりたい人形などなかった。恭平の役目は森岡人形を潰さずに、どうにか現状を保ちつづけることだけだった。我ながらつまらない人生だとは思う。しかし他にやるひとがないのだから、やむを得ない。

幸田や良隆によれば、桜井は時折、ここに姿を見せるらしい。しかし即売会がはじまってひと月近く経っても、桜井を見かけもしなければ、すれちがいもしなかった。それでいいんだと思う反面、会ってみたい気持ちがなくもない。

個展の招待状やメールを送ってきたのだから、桜井のほうは恭平と会ってもかまわないと思っっているはずだ。しかも弟しんじの慎次が個展

にいった際などには、社長はごいっしょじゃないんですかとさえ言っていたらしい。桜井に会いたいのか、会いたくないのか、恭平はわからなくなってきた。

しかし会ったところでどうするつもりだ。

どうすることもできない。なにしろ恭平は元妻の浮気現場を目撃してから、男としての機能がフリーズしたままだった。万が一にでも桜井と恋に落ちたところで、いざというときにはなにもできないのだ。

「じつはあたしも雛人形は、森岡人形でしてね」

「へええ」「そうだったんですかあ」

七歳上の姉のために買ったのを、あなたのためでもあるのよと、両親に言い聞かされたと、溝口本人に恭平は聞いている。アメリカ人と結婚して、ニューヨーク在住の姉が女の子を生んで、両親がその雛人形をあちらへ送ってしまったこともだ。その話をしただすのかと思っただが、そうではなかった。

「あたし、その雛人形がほんと大好きで、どれだけ見ても全然飽きませんでした。でも雛人形って、当たり前ですけど、飾ってあるのは二週間程度で、桃の節句がおわったら、さっさと片付けてしまおうでしょう？　それがイヤでたまらなくて、どうして片付けるん

だと泣きじゃくって、家族をだいぶ困らせたみたいで」

「ウチなんか母さんがズボラで、いつまでたっても飾ってあったんですよお」

「ズボラだなんて失礼ね。遅くてもゴールデンウィークまでには片付けていたわ」

「それがズボラだって言うのよ」

「だけどいき遅れることもなく、三十前には結婚できたからいいでしょ」

「そんなの結果論じゃない」

母娘の言い争いを止めるかのように、ベビーカーの中から泣き声が出た。娘がすぐさま赤ん坊を抱きあげ、背中を軽く叩いてあやす。

溝口はどうしたものかと困り顔になっていた。

ここはひとつ、助け舟をだしてやろうか。

そう思っって一歩踏みだそうとしたときだ。

「社長」

聞き覚えのある声だ。ふりむくと、そこに桜井桃枝が立っていた。

近い。近過ぎる。お辞儀をすれば、当たってしまうほどの距離だった。甘く芳しい香りが鼻をくすぐる。

「おひさしぶりです」

「う、うん、ああ」

一歩下がりがら答えたものの、恭平はしどろもどろになってしまふ。あまりに突然の出来事に対応しきれないのだ。全身からじつとりと汗が滲み^{にじ}でてきた。

なにか言わねば。でもなにを。当たり障りのないありきたりの質問をしよう。

「きみはいくつになった？」

口にしてから、しまったと気づく。女性に年齢を訊ねるなんて失礼ではないか。だが桜井はすんなり答えた。

「三十になりました」

嫌な顔ひとつせず、それどころか三十歳になったことを誇りに思っているかのような、自信に満ちた口ぶりですらあった。

「そうなんだ」

恭平は改めて桜井を見る。森岡人形で働いていた頃は主にパーカーにジーンズで、ほとんど化粧もせずに、うしろで無造作に束ねた髪をなびかせて、社内をばたばたと駆け回っていた。だがいまはだいぶちがう。白いニットのカーディガンにカーキ色のトレンチコートを羽織って、目の前にある雛人形とおなじ、渋めの紫色のロングスカートといういでたちだ。きれいに化粧を施し、肩まで伸ばした髪は、軽くカールしてあった。

すっかり大人の女だ。落ちついているだけでなく、加えてオーラ

を発しているようにも見えた。褒め言葉の一言でも言いたい気持ちはある。だがどうしても口からでてこない。

「ようやく社長にお会いできました」

ようやくとはどういう意味だ？ 俺に会いたかったのか？ そんなはずはない。自惚れるな、俺。

「幸田さんと熊谷さんには二、三回会ってましてね。熊谷さんには、この近所でランチを奢ってもらったこともあって」

その話は良隆に聞いていなかった。秘密にしているのは、店に領収書をもらい、営業先のだれかと食べたことにして、会社に請求するつもりだからにちがいない。恭平自身、元の会社にいた頃、その手口を使って、女の子に奢ることがあったのでわかるのだ。

あの野郎め。

「社長がここを訪れるのは土日の午後が多いって、お二方には聞いていたんですよ」

するといまここにきたのは、俺に会うために？

「私は今日、午後二時から人形づくりの実演をするんで、その準備にいまきたところなんです。そしたらほんとに社長がいらっしやっただんでビックリしました」

なんだ、それだけのことか。だから自惚れるなど言っただろ、と恭平は自分を叱りつける。

「社長も二週間前の土曜、実演なさったんですね」

「うん、ああ」

「熊谷さんに聞いて、ほんとはその日にくるつもりが、仕事でこられなくて」

陳列即売会の期間中、日本橋の百貨店で各人形店および人形作家の制作実演をおこなうようになったのは、四、五年前からだった。

制作実演とはいえ、どこもたいがいは頭師で、頭に顔を描く程度に過ぎない。森岡人形でもそうすることにしたのだが、宮沢には頼まなかった。実演中に酒の匂いを漂わせていたら困る。宣伝どころか評判を落としかねない。そこで峰三郎みねさぶろうにしてもらうことになり、即売会の会場でいざはじめようとしたところだ。峰は緊張でガチガチになり、筆を握った手はブルブルと震え、作業ができる状態ではなくなってしまった。やむなく恭平が代わりを務め、以来ずっとである。

待てよ。俺が実演した日にくるつもりだったとは、やはり俺に会おうとしたのでは。

「いま、お時間ありますか？ よかったらどこかでお茶でもしませんか」桜井は左腕ひだりに填めた腕時計に視線を落とす。「一時十五分には担当のところにいかなきゃいけないんで、四十分ほどですけど」

「ここには様子を見にきただけで、一時にはでて銀座に戻らなきゃ

ならないんだ」

そう答えてから、恭平は溝口のほうを横目で見る。三段飾りの（桃雅）でも、場所をとらずに飾ることができるかを熱心に語っている。

赤ん坊は抱っこされたままだが、すっかり泣き止んでおり、母娘はふたたび溝口の話に耳を傾けている。恭平が助け舟をださずとも、どうにかなったらしい。とりあえず地下の食品売場でなにか弁当を買ってきてやらねば。

「なんだ、そうだったんですか」

「すまない」思わず詫びてしまう。

「でもまだ二十分くらいは平気なわけですよね」

「それはまあ」

「だったらこの下の階にいきませんか？」

どうしてと訊ねる前に桜井は踵かかとを返し、歩きだしてしまった。恭平はやむなくそのあとを追う。彼女はエスカレーターではなく階段へむかっていた。そちらのほうが近かったのだ。

「接客してた子、森岡人形の社員なんですよね」

階段を下りかけるところで隣につくと、桜井がいきなりそう言った。

「いまはまだ大学院生で、今年の春に卒業したら正式に社員として雇う予定なんだ」

恭平は律儀に答える。

「自分でつくった雛人形を持ちこんで、それで採用になったって」

「熊谷に聞いた？ それとも幸田さん？」

「溝口さん本人です」

「話したのか」

「昨日の夕方、彼女から話しかけてきたんです」

階段を下りおえ、下の階に着いた。そこが家具売場だと知っていたものの、一度も足を踏み入れたことはない。けっこうな広さではあるが、桜井は迷うことなく、ずんずんと進んでいく。

「ふたりでどんな話を？」

「当たり前障りのない、他愛もない話ですよ。私のファンだとは言っていないですけど、ほんとかどうか」

なんだか刺とげのある言い方だ。

「それと森岡人形を辞めた理由を訊かれました」

「え？」 恭平は桜井の話を溝口にしたことはない。

「私が森岡人形にいたのを、熊谷さんと幸田さんに聞いてたらしく
っ」

やれやれ。おしゃべりなふたりだ。彼らに限らず森岡人形本社は社員やパートだれしも噂好きで、口が軽いのだ。なので恭平は酔っ払ったときなど、自らのトップシークレットを言わないよう注意し

ている。以前、病院に通っていたときも、どこで目撃されるかわからないので、市内どころか県内でもなく、わざわざ東京まで足を伸ばしていたくらいだ。

「きみは答えたのか、その理由を？」

「想像に任せるわと言っておきました」

含みのある言い方だ。はたして溝口はどんな想像をしたのだろう。

「なんか悪かったな」

「かまいませんよ。溝口さんだって悪気があったわけではないでしょうし」

やはり刺がある。

桜井が足を止めた。辿り着いたのは寝具のコーナーだ。大小さまざまなベッドが並び、そのうちのひとつに腰をおろすと、身体を縦に揺らしはじめた。

「ちよつと硬めかなあ」

桜井が呟くのを聞きながら、恭平はぼんやり突っ立っているしかなかった。するとだ。

「社長もどうぞ」桜井は右手でベッドを軽く叩いた。「座って弾力をたしかめてもらえませんか」

「なんで俺が」

「いいじゃないですか。お願いしますって」

やむなく桜井の隣に座ったが、彼女とは三十センチほど距離を置いた。そしておなじように身体を縦に揺らす。

「どうです？」

「こんなもんじゃないか。きみが言うほど硬くはないと思うが」

「だったら隣のはどうですかね」

隣のだけではなく、次から次へと並んで座り、縦に揺らして、硬軟いずれかを判断していく。なにをやっているんだと思いつつも、にやついている自分に恭平は気づいた。楽しいのだ。こんな愉快な心持ちになったのは、ひさしぶりである。座る度にふたりの距離は徐々に近づき、最後のベッドでは肩が触れていた。それでも桜井は離れようとしなない。恭平もそのままにいることにした。

「今度、引越すんです、私。いまのマンションは和室で押し入れから布団を出し入れしてたんですけど、つぎに住むところはぜんぶ洋間なんで、ベッドを買わなきゃならなくて、あちこちって調べてる最中なんです」

そういうことか。

「いまは代々木だったよな」桜井は毎年、会社宛に年賀状を送ってくるので知っていたのだ。「今度はどこに？」

「小金井こがねいです」

「きみが通っていた大学があるところだよな」

東京のほぼ真ん中で、新宿からだど中央線で各駅でも三十分程度の市だ。そして桜井が通っていたのは国立大で、彼女はそこのデザイン科だったのだ。

「よく覚えていましたね」

きみのことなら、なんでもよく覚えているよと言おうとしたが、やめておいた。冗談にしても聞きようによつてはキモいオジサンに思えたからだ。

「なんでわざわざ都心から郊外へ引越すんだい」そう訊ねてから、恭平ははたと気づいたことがあった。「結婚するのか」

「ちがいますって」桜井は弾けるように笑った。会社にいた頃と変わらぬ笑い方だった。「引越しの話をすると、みんなそう言うんですよねえ」

「すまん」

「謝ることないですって」桜井はまた笑う。その笑い声を聞くだけで、恭平は幸せな気分になれた。「私も三十ですし、そう思われても仕方ありません。ほんとのところは、ただ単に仕事量が増えて、いまとこが手狭になったんで、広いところへ越すことにしたんです。仕事場だけべつにしようかとも考えたんですが、いちいち行き来するのも面倒ですからね。だけど広ければ当然、家賃も高くなるじゃないですか。それでまあ、物件を探しているうちに、小金井あたり

ならばいまと変わらぬ家賃で、3LDKが借りられるんだと気づいて」

大学四年間暮らしていたアパートとおなじ町内に、部屋を見つけたのだという。

「おっきな二階建ての家を縦に三つに割ったっていうか、縦長の家を三つくつつけたっていうか、そんなつくりのどこなんで、材料や作品の出し入れも楽になるんでよかったですよ。いまんところはマンションの四階なんで、そりやもう大変で」

「いつ引っ越すの？」

「今月末には」

「なにか引っ越し祝いをしなくちゃな」

「だったらこのベッド、買ってくださいます？」

「いいよ」

「冗談ですよ、冗談」

桜井が慌てだす。恭平は本気だった。少々高めではあるが、だせない額ではない。しかし若い独身女性の引っ越し祝いにベッドは、なんとも意味深で非常識だと気づいた。

「俺も冗談で言ったまでだ」

「真顔なんで本気だと思って焦りましたよ」

ヤバイ、ヤバイ。危うくキモいオジサンになるところだった。

「フィギュア部長にも似たようなことを言われて。でもあつちは本気だったんで、ドン引きしました」

桜井は会社にいた頃も、フィギュア事業部部長を縮めて、フィギュア部長と呼んでいたのを恭平は思いだす。もちろん弟の慎次のことだ。

「きみ、弟に会ったのか」

「先週末に代官山だいかんやまへ伺ったんです」代官山にはフィギュア事業部があるのだ。「そのとき小金井に越す話をしたら、引越し祝いになんでも買ってやる、冷蔵庫でも洗濯機でもクーラーでも、なんならぜんぶ買ってあげてもいいって。さっきも言ったように本気過ぎて、断るのが大変でした。どうにか引き下がったと思ったら、今度は引越し代と敷金礼金を払うと言いだして、ほんと困りました」

「なにしてんだか、アイツは」

自分のことを棚にあげ、恭平は言った。なんのことはない、兄弟似た者同士なわけだ。これが百年以上の伝統を誇る森岡人形まつえいの末裔まっえいか。そう思うと、さすがに親父や祖父はもちろん、ご先祖様にまで遡さかのぼって申し訳なく思う。

「だけどきみ、なんで代官山へ？」

「トーキョーローカルサイキックの件で、打ちあわせがしたいと言われたものですから」

そう答えた桜井の眉間に皺が寄る。

「なんだい、そのトーキョーなんかかって」

「なんで社長、知らないんですか」

「なんで俺が知ってなきやいけない？」

「だってそれは」桜井はかつと目を見開き、恭平の顔をまじまじと見た。「社長はフィギュア部長に、トーキョーローカルサイキックの件を頼まれていないんですか」

「トーキョーなんかからして、わからないんだが」

「日本を舞台にしたアメコミで、日本人の女子高生が主人公なんです」話をしながら、桜井はコートのポケットからスマートフォンを取りだし、画面をタップする。爪が紫色だ。マニキュアか、あるいは付け爪かもしれない。いずれにせよ森岡人形で働いていた頃には、していなかったことだ。「これがそのヒロインです」

小さな画面の中で着物を着た若い女性が空に浮かんでいた。たしかにアメコミっぽい絵柄だ。よく見れば着物をモチーフにしたドレスというべき服装で、両肩を露あらわにして、胸の谷間もわずかに見える。そして彼女の周りには、帯状の布が数本漂っていた。

「天女みたいだな」

「まさにそのとおりです。ごくふつうの女子高生が、浜辺で犬と散歩をしていたら、少しも汚れていないドレスを拾って、試しに着て

みたところ、空が飛べたどころか、さまざまな能力を發揮できるようにもなり、正義のために活躍するという粗筋あらすじなんです」

「弟はこのヒロインのフィギュアをつくる気なのか」

「むこうの出版社から正式に依頼があったそうです。このフィギュアは日本人形の要素も取り入れたので、手伝ってほしいとフィギュア部長に頼まれました」

なるほど。話の筋は通っている。

「最初に電話をもらったとき、そういうことであれば社長に相談してみたらいかがですかって、私、言ったんですよ。そしたらフィギュア部長」

兄貴には断られてしまっただね。

そう答えたらしい。

「けど社長はトーキョーローカルサイキックさえもご存じないんだから、断りようがないですよね」

あの莫迦ばか、見え透いた嘘つきやがって。いったいどういうつもりだ。

仕事を頼みたいと桜井を誘いだし、口説こうとしているのかもしれない。ならば正々堂々と正攻法でいけ。仕事で恩を売って、女をモノにしようとするなんてクズもいいところである。

「そのフィギュアについては、どこまで進んでいるのかな」

「先週末がはじめての打ちあわせでした。だけど全然具体的な話はでてこなかったんですよ」桜井は不服そうに言い、少し口を尖らせた。すっかり大人の女なのに、そんなあどけない表情が、恭平には愛らしく思えた。「代官山には二時間近くいたんですが、そのほとんどはフィギュア部長の話を延々と聞かされただけでした。こうして海外からの依頼も増えてきて、フィギュア事業部は売上げが前年に對して百三十何パーセントだとか、三年先までラインナップが決まっています、今年はさらなる飛躍の年になるとか、そのためには原型師をはじめスタッフを倍に増やす必要があるとか、中国の工場だけでは生産が追いつかないので、東南アジアのどこかに工場を建設するつもりだとか、おかげで世界各国を飛び回っているの、日本にはなかなかいられないとか」

どれも嘘ではなく、誇張もしていなかった。弟はほんとうに話をただけである。ひとによっては感心し、立派だと褒め讃えることだろう。だが生憎あいにくと桜井の心には響かなかったようだ。自慢話を聞かされ、辟易ひやくえきしたと言わんばかりの口ぶりなのだ。

「でも今日は桜井さんと打ちあわせをするために、香港ホンコンの会食をキヤンセルしたなんて言いなんですよ。だったらもつと実のある話をしろって」

「言ったのかい？」

「言いませんよ。ここまで」桜井は自分の喉元を左手で触れる。「でかかりましたけどね。あと、そうそう。そんだけ忙しい合間を縫って、DJをやってるんで、今度、招待するとも言われました」

「恵比寿のクラブだろ」

「いったことあるんですか、社長」

「ないよ。クラブなんてとこ自体、いったことないし」

「私もです。そのあと私の引越しの話になって、ほんとうんざりでした」

そのときのことを思いだしたのか、桜井はこれ以上ないというくらい、うんざりした表情になった。

「申し訳ない」恭平は頭を下げた。「弟がとんだ迷惑をかけてしまつて」

「あ、いえ、そんな。社長が謝ることではありませんって。つていうか社長、そんなに何度も謝らないでください。なんか私、クレームみたいじゃないですか」

言われてみればそうだ。この短時間に何度、桜井に詫びの言葉を言ったことか。

「それできみ、どうする？ そのトーキョーなんかの件」

「仕事としては魅力的で、やってみたい気持ちはあるんです。日本人形とフィギュアの融合なんて、面白そうですし。けどなあ」桜

井はまだ手にしていたスマートフォン画面を見る。そこにはまだ天女をモチーフにしたヒロインがいた。「社長が知らなかったとなると、依頼自体、ほんとにあったかどうか」

「慎次にたしかめてみるよ」

「いいんですか」

「そのくらいお安い御用だ」

「でしたらあの、依頼がほんとで、この仕事をするようになったら、社長、あいだに入ってくれませんか」

慎次とは直にやりとりしたくないということだろう。

「わかった。そのへんもなんとかしよう」

「ありがとうございます」そう言って頭を下げてから、桜井は腕時計を見た。「大変です、社長。もう一時になっちゃってました。お引き止めしたうえに、無理なお願いまでしちゃって」

「いや、いいんだ」

今度ゆっくりメシでも、とは言えなかった。それではやはり弟とおなじになってしまうと思ったからだ。

しまった。

タクシーで移動中、昼飯を食べずにいたのを思いだし、銀座で降りて、コンビニでカロリーメイトとウーロン茶のペットボトルを買

い求め、イトインの片隅で三分足らずでお腹を満たし、すぐ近くの百貨店を裏口から入り、エレベーターで七階まであがって、日本橋よりもやや狭めの陳列即売会の会場に辿り着いたところで、恭平はようやく溝口のことを思いだした。

家具売場の寝具コーナーで、桜井とベッドを渡り歩きというか渡り座り、話をしているうちに、頭の中からすっかり弾け飛んでしまっていたのである。当然ながら日本橋の百貨店の食品売場で、差し入れの弁当を買うこともなかった。

反省しきりである。溝口には申し訳なく思う。LINEかメールを送ろうかと思ったが、どう書いていいのかわからない。きみに弁当を差し入れるつもりが、桜井といっしょにいたために忘れてしまったなんて送ったところで、溝口にはチンパンカンパンにちがいない。

そもそも俺がいたって気づいていたかな。

そのへんも微妙である。閉店後にふたたび日本橋へ行って、夕飯を奢ろうかと考える。しかしランチならばふたりきりでもいいが夕飯はどうだろう。疾しい^{やま}気持ちは微塵^{みじん}もないにしても、だれかの耳に入れば、瞬く間に森岡人形本社のみんなに広まってしまう。かといって溝口に口止めするのも変な話だ。ならばいっそ幸田と良隆も誘おうか。駄目だ。幸田はまだしも良隆は酒癖が悪い。しかも彼は

溝口に気がある。正月明けすぐ、鐘撞駅前の中華料理店で新年会をおこなったが、その際には酔った良隆が溝口に近寄らないよう、父親の道隆みちたかが見張っていたくらいだ。

結局は今度またランチを奢るなり、差し入れに弁当を買っていきなりすることにした。それがいちばん無難だからだ。そこまでいきつくのに二時間以上もかかってしまった。なんでこんなチマチマしたことで悩まねばならないのだと我ながら情けなくなる。桜井に余計なちよっかいをだしているとはいえ、世界各地を飛び回り、億単位の売上げを叩きだす慎次とはまるでちがう。東南アジアのどこに工場をつくれればいいか、それがいまの弟のいちばんの悩みだ。スケールがちがいきすぎる。

「パパみて、あれカワイイイイツ」

三歳くらいの女の子が叫ぶ。パパと呼ぶ男性に抱っこされた彼女が指差す先には森岡人形の三段飾り、〈桃雅〉があった。

「そうだねえ、かわいいねえ」

「ユカ、もっとよくみたいから、おろしてちょうだい」

女の子はおろしてもらったが、背が足らなくて、人形を見ることのできない。雛人形は布で覆ったテーブルの上に飾ってある。恭平は布を捲めくって、その下にある踏み台めくをだした。こういうときのために準備しておいたのだ。

「どうぞ」

「ありがとうございます」先に礼を言ったのはパパだった。恭平よりも四、五歳は若そうだ。「ユカちゃんもお礼言って」

「ありがとうございます」

女の子は深々とお辞儀をした。その愛らしさに恭平はほんの少し胸が苦しくなる。

「どう致しまして」

笑顔をつくって答えながら、もしも元妻とのあいだに子どもがいたらと考えてしまう。いまごろは家族三人で幸せに暮らせていたかもしれない。ただし三十歳までは子どもが欲しくないと言ったのは元妻だった。

それまでふたりきりの生活を楽しみましょ。

そう言っておきながら、元妻はべつの男との情事を楽しんでいたのだ。男に跨またがった全裸の彼女の姿が脳裏に浮かぶ。

「パパ、これ、かってええ」

パパが女の子の隣にしゃがんだ。ちょうど目の前にある値札を見て、その表情が変わった。想像以上に高額だったのだろう。うろたえてさえいる。そんなパパには自らの会社の商品とはいえ勧めにくい。正直、購入するとも思えなかった。

「クリスマスに、サンタさんからお人形さんもらったばかりだろ」

「それとこれとはべつよ」

女の子はにべもない言い方をする。

「他のお雛様も見てみようよ」

「これがいちばんステキだわ」

お嬢さん、お目が高い。

「ウチにはママのお雛様があるし」

「ユカはユカのおひなさまがほしいの」

「よろしければこちらをどうぞ」

恭平はふたたびテーブルを覆った布を捲り、手提げ袋からパンフレットをだしてパパに渡す。

「我が社のお雛様をすべて紹介しておりますので、参考になさってください」

もっとお求めやすい値段のお雛様もあるのだ。

「ユカ、この中から選ぶのはどうだ？ 今度のクリスマスまでイ子にしていたら、サンタさんがくれるかもしれないぞ」

「ほんとに？」

「ほんとですよ」恭平はつい口にしてしまった。自社の商品を買ってほしかったのではない。女の子の夢が叶えばいいと思ったのだ。

「それじゃ、いこっか」

パパに抱っこされた女の子が「バイバイ」と手を振るので、恭平

も振り返す。

男性の機能を使えるようにするため、二、三年前まではいくつかの病院に通った。泌尿器科だけでなく、心療内科にも診てもらった。さまざまな薬も試した。しかしいずれも金がかかるばかりで、満足な効果は得られなかった。いまや諦めの境地である。しかし心のどこかで、子どもは欲しいとは思っていた。跡取りがどうこうではない。父親になりたいのだ。

スーツのポケットでスマートフォンが震えた。電話だ。だして画面を見ると、03からはじまる電話番号が並んでいた。登録していない相手からの電話くらい、不安になることはない。

「もしもし」

「森岡恭平さんでいらつしやいますか」聞き覚えのない女性の声だった。どちら様でしょうかと訊ねる前に、相手は都内にある大学病院の者だと言った。恭平も名前だけは知っている有名な病院だった。

「宮沢博ひろしという方をご存じですか」

「知っています。私が経営する森岡人形という会社の社員ですが、彼がなにか」

「東京駅で倒れて、運ばれてきました」

「どうして東京駅で？ いや、それよりもだ。」

「倒れてって、いったいなにか」

「まだわかりません。できればこちらにきていただきたいのですが」

〈つづく〉